



# 私の なんとか しなきゃ!

Vol. 45

## PROFILE

1992年徳島県出身。『EDGE STYLE』（双葉社）レギュラーモデル。ティーン向けファッション誌『Ranzuki』（ぶんか社）などでも活躍。チャリティーフリーマーケット「HAPPY CLOSET」など、ファッションを通じて世界の問題について伝える活動にも取り組む。慶應義塾大学総合政策学部4年。

中学3年の時、家族でインドネシアのバリ島を旅行することになりました。ガイドブックに載っている“南の楽園”に行けると楽しみにしていたのですが、現地の空港に着いた途端、そのイメージは一気に崩れました。

到着ゲートを出ると小さな子どもたちが寄ってきて、ずっと手を差し出してきます。どうしたのかなと思っていたら、「お金ちょうだい」と。あまりに突然のことで驚きました。でも、宿泊先のホテルにはいわゆるリゾートの世界が広がっていて、そのギャップにとても戸惑ったのを覚えています。

帰国してからしばらくはショックが大きくて、正直、開発途上国に苦手意識を持っていました。でも、ずっと心に引っ掛かっていたんです。あの子たちは、なぜ物乞いをしなければならなかったのだろうと…。高校に入ると国際関係について学ぶ授業があり、「途上国の現状をもっと知りたい」と思うようになりました。

そのためにもう1回、現地に足を運んでみたいと、日本のNGOが企画している



© modelpress

スタディーツアーを調べてみました。スタッフの方にも話を聞きに行ったのですが、その時に初めて知ったのが「フェアトレード」でした。途上国で作られた製品を公正な価格で販売し、現地の人たちの生活向上につなげようという取り組みです。

モデルの仕事をしているのだから、ファッションを通じて何かお手伝いができるのではないかと。フェアトレードは、まさにぴったりでした。そこでNGOの方と連携してデザインした洋服やヘアゴムをフィリピンの女性に作ってもらい、日本で販売するプロジェクトを始めました。

そして高校2年の終わりに、生産者の人たちを訪ねて現地に行きました。直接顔を合わせて話をするのは初めてで緊張していたのですが、とても温かく迎えてもらえて、一気に距離が縮まりました。何よりも感動したのが、みんな前向きに仕事に取り組んでいること。「こういうデザインにしたらかわいい」「こっこの形が使いやすいね」など、どんどんアイデアを出してくれました。仕事が“生きる

力”になっているように感じました。

今も時間を見つけて東南アジアなどに足を運んでいますが、実際に行ってみると世界が広がります。日本での当たり前が当たり前じゃない。遠いどこかの国で起こっている出来事を“自分ごと”として考えられるようになりました。

今やってみたいのは、ファンの人たちを対象にしたスタディーツアーです。私の活動を通じて途上国に興味を持ってくれた人もたくさんいるのですが、いきなり一人で行くのはハードルが高いのも確か。みんなで途上国に行き、たくさんの人と出会い、一緒に考え、学んでいきたい。そうすることで、世界と日本の若い人たちをつなぐお手伝いができたらいいなと思っています。

「なんとかしなきゃ!プロジェクト」は、開発途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクトです。ウェブサイトやFacebookの専用ページを通じて、さまざまな国際協力の情報を発信していきます。

なんとかしなきゃ で 検索